



「世界手洗いの日」、セブ州北部のサンレヒオ市でも手洗いイベントが行われました

セブ通信

フィリピン・セブ島北部地域保健
衛生事業の現場から

vol. 2

2017. 10. 31 田村 由美

ボランティアってなんだろう？

10月15日は「Global Hand Washing Day（世界手洗いの日）」。日赤保健要員研修生として派遣されている私も、フィリピン赤十字社セブ支部主催のイベントのお手伝いに行ってきました。

フィリピンでは、正しい手洗いをすることによって防げる病気や救える命がまだまだあります。私が行った会場では、手洗いの必要性や正しい方法を地域の人々に説明して実際にやってみたり、石けんやタオルなどの衛生用品を配布したりして、手洗いの普及活動を行いました。

こうしたイベントで活躍するのは、フィリピン赤十字社の職員だけでなく、前号でも触れたボランティア。今回は、「ボランティア」についての私の気づきを綴りたいと思います。

ボランティアのイメージ

皆さんは「ボランティア」と聞いてどんなことを思い浮かべますか？ お給料が出ない、人や社会の役に立つことをする、誰かに強制されてすることじゃない、…。私のボランティアに対するイメージはこんなところ。じゃあ、どんな人がボランティアをするのでしょうか？ 無給なわけだから、「誰かの役に立ちたい」という気持ちだけではできないのでは？ じゃあ、お金や時間に余裕のある人？ でも、フィリピン赤十字社は、国のサービスが十分に届いていない場所で保健事業を展開しています。そこにはお金や時間に余裕のある人は多くなさそうです。

裕福ではない地域の人々でもボランティア活動を続けられるよう、「お給料」とまではいなくても日当や交通費が支払われているのでは？ と思った私は、フィリピン赤十字社本社のオリエンテーションで「本当に一切対価がない

のですか？」と聞いてみました。答えは「ない。なぜなら、ボランティアだから」。それを聞いて、「フィリピンにはお金なんていらなから社会の役に立ちたいと思って活動している人がたくさんいるんだ」と驚きました。が、ある日の会議でその言葉の意味が分かったのです。

背景はさまざま

私が派遣されているセブ島北部には、赤十字のことがあまり知られていない地域があります。ここで赤十字活動を普及するため、まずはボランティアを募集し活動のための研修を行います。事業が始まって半年、進捗状況や課題を整理する会議でのこと、ある地区の担当者から「この村では、ボランティアの研修に出る人に、村長が報酬として100ペソ支払っています」と聞いた私は、「えっ、対価はないんじゃないの？」とびっくりしました。そんな私にスタッフは、「赤十字はお金を出していない。村の判断で、村が払っているものだ」と説明しました。

他にも、村長が指名した村職員がボランティアとして参加している、という村もあります（興味のある方は、日赤本社HPの赤十字国際ニュース2017年30号をご覧ください）。つまり私は、「対価がない」ということをすごく狭い意味で捉えていたのです。村から報酬をもらっているボランティアもいれば、給与が出ている仕事の一部としてボランティアをしている人もいます。もちろん、報酬もなく仕事でもなく参加しているボランティアもいる。いろんなボランティアのかたちがあると気がついたのでした。

次はいよいよボランティアの研修が行われます。どんな人々に会えるのか、楽しみです。



手洗いの前に…ZUNBA!

セブではズンバが流行っているようで、イベントには必ずズンバがプログラムに入っています。この日も準備運動がてら(?)、参加者全員でズンバを踊りました。



要員のとおる1日

- 8:00 事務所に出勤、メールチェック、書類づくり
- 11:00 研修で使う物品の準備
- 12:00 事務所の近くの大衆食堂で昼ごはん
- 13:30 とりの市で手洗いイベントの物品準備
- 15:00 おやつ（揚げバナナ↑、おいしい!）
- 16:00 事務所に戻って書類づくり
- 17:00 帰宅